

古高ドイツ語の *sculan* と未来表現

— 「オットフリート」, 「タツィアーン」を手掛かりに—

金子哲太

1. 序

ゲルマン語においては元来、文法範疇としての未来時制が存在しなかったことはよく知られるところである。特別な要請がないかぎり、未来に関することを表現する場合には、たいていは現在形を用いてその役割が果たされていた。

もとより時制形式としては、現在形と過去形しか見られなかったものであり、当時の翻訳家たちは豊富な時制形式を持つギリシャ語・ラテン語の時制を、ゲルマン語のその乏しい状況のもとで表現しなければならなかった。ブリンクマン (H. Brinkmann) は、ゲルマン人の時間に対する考え方を以下のように説明している。「ゲルマン人は時間感覚を持っていなかった。昨日は今日の前提として経験されなかったし、今日は昨日の結果や、昨日に続くものとして経験されなかった。(中略) 事象・行為・状態は、意識が既に持っていた時間系列には組み込まれなかった。(中略) 出来事は平面的に、時間的見通しなしで捉えられた。意識の中で生きている、現実的なことがらを現在時制で表現し、隔たって消え失せたことがらを過去時制で表現していた」¹⁾。

つまりゲルマン人は未来に対するベルスペクティブを持っていなかったし、未来という世界を区切り、切り取ろうとすることもせず、あくまでも現実の世界という平面上において、来つつあること、来るべきことを感覚的に捉えていた。彼らの意識の中にはまだ未来という感覚が芽生えていなかったのである。しかしこのようなゲルマン人のなかにあつて、それまでに経験したことの無いギリシャ語・ラテン語の未来時制を自分たちの言語で表さなければならなかった翻訳家たちは、苦心を強い

られ、推考を余儀なくされたのである。その結果、さまざまな試みがなされるに至った。

本稿において、まずゴート語から古高ドイツ語の時代にかけて現れる未来的表現を概観し、次に古高ドイツ語の *sculan* (*nhd. sollen*) の役割を特に取り上げ、例証によってその位置付けを行いたい。なお「未来」の意味を捉える上で、常に慎重な態度が求められるので、本稿では主に現在時制という環境で例文を取り扱うことにした。

2. ゴート語の未来表現

まず、最も古いゲルマン語の言語状況を窺い知ることのできるゴート語に見られる、古高ドイツ語以前の時代の未来的表現を整理しておく。これによって、早い時代のゲルマン人の、それまでは持っていなかった未来に対する取り組み・捉え方を知り、それを新しい時間意識の萌芽と見做すことができよう。また筆者は、ウルフィラという一僧侶の翻訳文献に用いられた、西ゲルマン語とは異なった流れを汲む東ゲルマン語を、それよりは遙かに文献の豊富な古高ドイツ語との関連において考察するつもりである。ギリシャ語にせよ、ラテン語にせよ、それらは未来時制を持っていたのであり、それを持っていないゴート語は前者を翻訳、古高ドイツ語は後者を翻訳、あるいは翻案として扱う上で、同じ問題にぶつかっているである。また本稿で取り扱う文献はいずれも聖書文学というジャンルに属するものであり、未来に対する態度を比較する上では同列に扱うことができよう。これらのことから、ゴート語と古高ドイツ語との関連性を視野に入れつつ論を進めていくことは、整合性から逸脱しているとは言えないであろう。

シュトライトベルク (W. Streitberg) が分類しているように、ウルフィラはギリシャ語の未来時制に対して、いくつかの表現手段による翻訳を試みた²。彼の分類に倣ってそれらを大別し、各々の代表的な例を順次挙げ、その用法を検証していく。以下の例文に現れるギリシャ語の動詞は、例文 2) の前半部に見られる例以外はすべて未来形である。

(1) 動詞の現在形 (主に完了相の動詞)

- 1) managai fram urrunsa jah saggqa qimand, jah anakumbjand
miþ Abrahama... in þiudangardjai himinē (Mat. 8,11)

*πολλοὶ ἀπὸ ἀνατολῶν καὶ δυσμῶν ἤξουσιν καὶ ἀνακλιθῆσονται
μετὰ Ἀβραάμ... ἐν τῇ βασιλείᾳ τῶν οὐρανῶν*

大勢の人が西から、東からやって来るであろうし、天の御国でア
ブラハム…とともに食卓につくであろう。

例文1)の qiman(> nhd. kommen)は完了相の動詞であり、anakumb-
jan も、もともと「横になる；卓につく」といった意味を持ち、完了的な
動詞であるといえよう²。「やって来る」のも「食卓につく」のも、未来に
おいて成される行為である。元来、完了相の動詞を用いた現在時制の文
は、未来的な意味合いを持つのである。行為の終結の瞬間は完了を意味
し、それは未来に存在するのである (Ibid., S. 202 § 302)。つまり完了相
の動詞は、現在形で表現される場合、その事象・行為は常に未来におい
てはじめて到達されるのである。同じことはもちろん現代ドイツ語にお
いても言えるのであり、Ich komme gleich!といった例と重ね合わせるこ
とができる。

またとくに ga-という接頭辞の助けを借りて、完了的ニュアンスを強
調したり、時には完了相以外の動詞を完了的にしたりすることによって、
未来の意味を際立たせていることも少なくない。

- 2) leitul jah ni saíviþ mik, jah aftra leitul jah gasaíviþ mik.

(Joh. 16,19)

Μικρὸν καὶ οὐ θεωρεῖτέ με, καὶ πάλιν μικρὸν καὶ ὄψεσθέ με;

しばらくすると汝らは私を見なくなるが、更にしばらくすると汝
らは私を見るであろう。

この例文では、発話している時点で「見る」という行為はどちらも未
だなされていない。つまり未来の事象なのである。しかしギリシャ語の
原典では前者は現在形で表現されている。それは近い未来のことなので、
現実の世界として捉えられているのである。他方「しばらくすると…見

る」という行為は、現実の世界から離れて、より未来的なものになり、未来時制を用いるのである。この区別を明確にするために、ウルフィラは、ga-という造語手段を使用した。それによってsaivan (> nhd. sehen) は完了的意味合いを強め、つまり「見る」という行為はより点的 (punktuell) となり、前述のとおり純粋な未来に近づくのである。こうしてこの2つの事象に時間的な隔たりが生み出されるのである。

ゴート語においては、このように完了的な意味合いを持たせたり、強調させることによって、多くの動詞の現在形が、未来的な事象を明示することができた。ギリシャ語の未来は、最も一般的にはこのように取り扱われていた。

もう一点、言及すべきことがある。

3) jainar wairþiþ grēts jah krusts tūnþiwē (Mat.8,12)

ἐκεῖ ἔσται ὁ κλαυθμὸς καὶ ὁ βρυγμὸς τῶν ὀδόντων.

ここでは(国の子らは)泣き、歯ぎしりするであろう。(泣くこと、歯ぎしりがある。)

例文3)では、ギリシャ語の*ἔσται*が、ゴート語ではwairþiþに翻訳されている。つまり存在を表す*eiþi*の未来を、ウルフィラは、起動相の動詞wairþanを使用して表現している。「~であろう」という状態を表す完了の動詞の未来を、本来「~となる」という意味の動詞で翻訳することは、少々性急な語選択のように思われるが、そうするより仕方がなかったのであろう。ここにおいても、完了的要素が未来の表現に選択されたというその一面を窺い知ることができよう。ギリシャ語の*ἔσομαι*は「規則正しく」(Ibid., S. 203), ゴート語句のwairþanで翻訳されているのである。なお、以下の(2)~(5)の用法は、未完了(継続相)的な未来である。

(2) 希求法

4) hwaiwa sijai þata, þandei aban ni kann? (Luk.1,34)

Πῶς ἔσται τοῦτο, ἐπεὶ ἄνδρα οὐ γινώσκω;

どうしてそのようなことがあり得るのでしょうか。私は男の人を
知りませんのに。

この例文ではギリシャ語の *εἰμί* の未来形が、ゴート語で *wisan* の希求法・現在で表されている。受胎告知をされたマリアが、天使に向かって驚愕と不信の念をもって訴えかけている場面である。内容的には未来というよりも、不確実な事象に対する疑惑・疑念といった意味を含む話法性が強い。この希求法は可能性を表す用法であり、これによってこれから起こるであろうことに対する、話者の態度を表現することができる。そしてこれは願望や要求、あるいはそれに近いものが表現される場合に、ギリシャ語の未来形の代替形として効果を発揮するのである⁴。

(3) *duginnan*+不定詞

5) *wai izwis, jūs hlaljandans nū, untē gaunōn jah grētan duginnid.*
(Luk. 6, 25)

οὐαί, οἱ γελῶντες νῦν, ὅτι πενήθησете καὶ κλαύσετε.

汝らは、今笑っている汝らは災いだ。なぜなら悲しみ、泣くであろうから。

ゴート語の *duginnan* は、現代ドイツ語では *beginnen* に相当し、元来「～し始める」という意味を持つ動詞である。この例文では、「悲しみ、泣き始める」という意味にとることも不可能ではないが、ギリシャ語では未来形が用いられているのである。ここにおいても、その起動相的なニュアンスから未来的な事象が表されうることが見て取れよう。しかしながら、この用法は作品全体を通して2例⁵しかみられず、試行段階にとどまっていると言えようか。

(4) *haban*+不定詞

6) *jah þarei im ik, þaruh sa andbahts meins wisan habaiþ.*

(Joh. 12, 26)

καὶ ὅπου εἰμι ἐγώ, ἐκεῖ καὶ ὁ διάκονος ὁ ἐμὸς ἔσται.

すると私がいるところに、(そこに) 私に仕える人がいるだろう。

この haban+不定詞も、現代ドイツ語の haben+zu 不定詞に相当し、暗に「～しなければならない」といった義務の意味が含まれている。キリストの言葉による確信的な未来は、必然的に起こりうる義務となって表現されているのであろう。ここにも話法的意味合いが強く現れている。因みにこの形式は、幅広く用いられていた古代教会ラテン語の habēre (あるいは incipēre)+不定詞の迂言形に立ち戻ることができる (Behaghel 1822 S. 258) が、ここでは本稿の性格上、割愛することにする。この用法も 3 例しか確認できない⁶。

(5) skulan+不定詞

7) *ἴνα skuli pata barn wairpan?* (Luk. 1, 66)

Ti ἄρα τὸ παιδίον τοῦτο ἔσται;

この子は (いったい) 何になるのだろうか。

現代ドイツ語の sollen に当たるこの語も、他の箇所では全て可能性・義務・必然性など、元来持っている話法的意味を常に帯びている。未来時制の書き換えとして用いられているのは、この箇所のみである⁷。しかし例文 7) においても、ギリシャ語では未来時制を用いているものの、やはり話法性が色濃く表れていて、純粋な未来とは言えない。この用例を、グリム (J. Grimm) は「特異な」例外として引用し、skulan+不定詞をほとんど未来時制の代替とは認めていない⁸。

さて以上のことから、ゴート語における未来時制の代替表現には、迂言形式が極めて少ないということが、最も注目すべき点として挙げられる。ウルフィラは主として、完了相の動詞をそのまま、あるいは ga- という前綴りによって、また希求法を用いて話法的意味合いを持たせることによって、ギリシャ語の未来を書き換えていた。(3), (4), (5)に挙げたよ

うな迂言形式は、未だ試行段階なのである。つまり彼は分析的 (analytisch) な表現手段を試みてはいるものの、まだ本格的に取り入れることをしていなかった。このことを踏まえて、古高ドイツ語の未来表現を見ていくことにしよう。

3. 古高ドイツ語の未来表現

ゴート語の時代からおよそ5世紀を経た古高ドイツ語の時代では、未来時制に対する態度に変化が生じている。以下に順次挙げていく古高ドイツ語の引用は、主に「タツィアーン」(830年頃成立、以下 Tat.と略す)そして「オットフリートの福音書」(870年頃成立、以下 Otf.と略す)からの例である。後者は、可能なかぎりウルガータ聖書に対応する箇所を題材として、前者とともにラテン語の語法との関係を追っていくことにする。以下に、古高ドイツ語の未来表現を概観する。

(1) 動詞の現在形

- 8) „ih irstantu“, quad er zi in, „so ih thritten dages tâtêr bin.“
(Otf. IV. 36, 8)

「私は三日間死人となったとき(あと)、復活するのだ。」と彼(キリスト)は彼らに言った。

- „Post trēs diēs resurgam“
(Mat. 27, 63)
「私は三日の後に復活するのだ。」

- 9) inti gisihit iogiuuelih fleisc gotes heili. (Tat. 13, 3)
et vidēbit omnis cārō salūtāre dei. (Luk. 3, 6)
そして全人類が神の救いを見るのである。

8), 9)双方の例文における完了相の動詞は、それぞれラテン語の聖書では *resurgam*, *vidēbit* と、いずれも未来時制である。このような性質を持った動詞では、前章で述べたように、その行為・事象が完了する瞬間は、未来において果たされるのである。このような捉え方(用法)は、ゴート語と同じく未来時制の代替として最も一般的に行われていた。

ところで例文9)では、当該の動詞に、ゴート語の *ga-* に相当する接頭辞 *gi-* が付けられているが、古高ドイツ語では未来表現の手段としてこの *gi-* を特別扱いしていたとは言えないようである。例文2) で挙げた、ヨハネ16, 19の箇所を「タツィアーン」で見よう。

- 10) *luzila stunta ni gisehet ir mih inti abur luzila stunta gisehet ir mih.* (Tat. 174, 3)
modicum et nōn vidēbitis mē, et iterum modicum et vidēbitis mē, (Joh. 16, 19)
しばらくすると汝らは私を見なくなるが、更にしばらくすると汝らは私を見るであろう。

この例文のラテン語にあたる箇所では、前述のギリシャ語と同様に「見る」という行為は両方とも未来形で表現されている。しかしこの例文ではゴート語の場合とは異なり、*gi-* によって未来的なニュアンスを浮き彫りにして、一方の意味を強調させるといった技巧を用いてはいない。双方に *gi-* が付加されており、それらの動詞だけを見る限りでは、時間的な隔たりを特に感覚的に受け止めることはできない。

- 11) *inti thū ginemnis sīnan namon Heilant,* (Tat. 5, 8)
et vocābis nōmen ēius Ihēsum, (Mat. 1, 21)
そして汝は彼 (イエス) の名を救世主と名付けなさい。
12) *inti nemnis thū sīnan namon Iōhannem.* (Tat. 2, 5)
et vocābis nōmen ēius Iohannem: (Luk. 1, 13)
そして汝は彼の名をヨハネと名付けなさい。

例文11), 12) では、それぞれ命令的な意味合いを含んだ内容になっているが、動詞の部分はラテン語の *vocābis* と未来時制をとっている。意味内容は殆ど異ならないにもかかわらず、前者の例には、*gi-* が付結され、後者にはそれが無い。ゴート語に端を発する接頭辞 *gi-* の未来的な用法が、古高ドイツ語に踏襲されたものかどうかを決定するには、さらに幅

広い調査が必要であるが、筆者の見るかぎりでは後に述べるような分析的手段の発展に押され、あるいは未来時制に対する関心の乏しさから、少なからずその勢力を弱めているように思われる。「タツィアーン」では、未完了の性質を持った動詞でさえも現在形のままで翻訳されている。

13) Uuê iu thie nû lahhet, bithiu uuanta ir vyuofet inti riozet.
(Tat. 23, 3)

Væ vōbīs quī rīdetis nunc, quia lūgēbitis et flēbitis.
(Luk. 6, 25)

今笑っている汝らはわざわいである。なぜなら汝らは嘆き悲しみ、泣くであろうから。

14) Her ist uuârlihho mihhil fora truhtîne... (Tat. 2, 6)
Erit enim magnus cōram dominō,... (Luk. 1, 15)
彼(ヨハネ)はまことに主の前で大なる者となる。

例文13)では、「嘆き悲しむ」も、「泣く」もラテン語では未来時制をとっている(lugēbitis, flēbitis)。どちらも、状態を表す未完了相の動詞であり、上例のようにそのまま現在形で用いても、点的・完了的意味合いによる未来的なニュアンスは現れ出てこない。例文14)では、天使がザカリアに預言的内容を告知するところであるが、ここにおいてもラテン語(erit)に従うことなく、現在形で表されている。ウルフィラが使用したように、uuesanの代わりに起動相的な uuerdan を用いた箇所もあるが、多数派ではないようである。これらのように、「タツィアーン」では未来時制に関しては統一性がなく、未完了の動詞においても、未来的な内容に対する配慮がなされていないことが見受けられる。

(2) 接続法

グリムは、ゴート語の希求法による未来的表現が、ドイツ語の諸方言では欠けている(Ibid., S. 207)、との見解を下しているが、「タツィアーン」ではそれが見られるのである。

- 15) Iogiuuefl̄h tal uuerde gifullit inti iogiuuefl̄h berg inti nollo uuerde giōdmuotf̄gōt, inti uuerde abahu in rehtu,..

(Tat. 13, 3)

Omnis vallis implēbitur et omnis mōns et collis humiliābitur, et erunt prāva in dīrēcta,..

(Luk. 3, 5)

すべての谷は埋められるであろうし、すべての山や丘は低くされ、曲がった道は真っ直ぐになるであろう。

- 16) inti th̄n fater, thie iz gisihit in tougalnesse, gelte thir.

(Tat. 33, 3)

et pater tuus, quī videt in absconditō, reddet tibi.

(Mat. 6, 4)

すると隠れたところでそれを見ておられる汝の父は、汝に報いて下さるであろう。

上の2例はいずれも接続法が用いられており、それぞれの事象内容に対する話者の推量が出され、預言的な表現となっているが、ラテン語では未来時制で表されている (*implēbitur*, *humiliābitur*, *erunt* ; *reddet*)。ザルトファイト (L. Saltveit) は、古高ドイツ語にもゴート語のような接続法による未来表現は知られていたとしながらも、以下のように述べている。「この現象 (= 接続法現在による未来表現) はしかし、非常に稀であるので、ゴート語のような体系的な分類は殆ど不可能なのである。」¹⁰ (括弧内は筆者による加筆)。

さて、前章でゴート語の未来表現を概観したときに見た(3), (4)の用法は古高ドイツ語では見られないのである。ゴート語の *duginnan* に相当する語は古高ドイツ語では *biginnan* であるが、それは「～し始める」といった本来の意味を失っていないか、または不定詞の動詞概念を強調する場合や韻の制約による単なる書き換え (Umschreibung) に用いられるものであり、未来表現には使用されない¹¹のである。また *habēn* + 不定詞は、不定詞の前に *zi* を伴って現れることが多いが、これも古高ドイツ語ではラテン語の未来時制の代役を務めることはなかった。同じくこの語も、「～すべきである、～する理由がある」といった義務・根拠という本

来の意味を崩さなかった¹²。

(3) sculan+不定詞

古高ドイツ語の時代に入ると、未来表現としての *sculan* が、かなりの勢力をもって台頭してくるのである。これに続いて同じく助動詞を用いた表現として、その頻度はかなり落ちるものの、*wollen*, *mugun*, *muozen* が挙げられる¹³。これらの語は、現代ドイツ語の話法の助動詞と呼ばれるものであるが、本来備わっていた義務・意志・要求・可能性など話法的な意味から、未来的な意味が抽出され、使用されたものと考えられる。このため、話法性が表面に押し出される度合いによっては、未来表現か否かを判断することが困難な場合も少なくないが、まず「ウルガータ」の未来形に対応する箇所を考察していきたいと思う。

17) „Bergâ sculun sufnan, ther nol then dal rînan ;“

(Otf. I. 23, 23)

「山々は低くなり、岡は谷にぶつかる（と等しくなる）であろう。」

18) Thir willu ih geban innan thes sluzilâ himiles, その間に私は

汝に、天の鍵を与えましょう。

(Otf. III. 12, 37)

Tibî dâbō clâvēs rēgnī caelōrum ;

(Mat. 16, 19)

私は汝に天国の鍵を与えましょう。

19) „Wâr mugun wir nu biginnan¹⁴, mit koufu brôt giwinnan...?“

(Otf. III. 6, 17)

「我々はどこでパンを買って手に入れることができようか。」

Unde emēmus pānēs, ut mandūcent hī? (Joh. 6, 5)

この人達が食べるようにできるように何処からパンを手に入れようか。

20) Thia zessa drat ih untar fuaz, si furdir darôn mir ni muaz,

(Otf. V. 14, 17)

その大波を私は足の下に踏みつけるのです。それは私をもうそれ以上辱めることはないでしょう。

例文15)の「タツィアーン」の例で接続法を確認した箇所は、「オットフリート」では、例文17)のごとく *sculan* が用いられている(ラテン語の表現も例文15)参照)。例文18)では主語が1人称であり、話者の意志が表され、例文19)でも同じく1人称で、話者の疑念の意を表す話法的態度が描写されている。けれどもこれらの箇所は、ウルガータでは未来時制をとっているのである(*dābō*「与えましょう」; *emēmus*「手に入れる」)。「オットフリート」において、聖書表現に沿う箇所に *muozen* は見つからなかったが、ケレも指摘しているように¹⁵、例文20)では *muozen* は未来表現の役割を果たしているのである。これらの例からも既に見て取れるように、各々の語はそれ自体の持つ話法的なニュアンスを醸し出しつつ、未来表現に貢献しているのである。

ここで付言しておかなければならないのは、ヴィルマンズらが述べているように、「タツィアーン」では未来時制を表す *sculan* の迂言形は殆ど避けられている¹⁶、ということである。

- 21) *uzar sîn namo scāl sîn Iohannes.* (Tat. 4, 11)
sed vocābitur Iohannes. (Luk. 1, 60)
 そうではなくて彼の名はヨハネと付けなければならないのです。

この例は、ラテン語の未来を *sculan* を用いて翻訳した、全3例のうちの一つである¹⁷ (*vocābitur*「呼ばれるであろう」が、プリンクマンは例外として取り上げている(Brinkmann 1965 a. a. O.)). 同様の内容を含む例文11), 12)を参照するまでもなく、エリザベートがヨハネと名付けるように命令・指示されているのであり、未来時制が話法的に追いやられてしまっている、というのである。*sculan* を未来表現の助動詞として捉えていず、そもそも全体として未来的な行為を示すための要求を持っていなかった「タツィアーン」より、それを備えていた、更に古い時代の作品「イシドール」(8世紀末成立)の方が勝っている、とまでプリンクマンは言っている。「タツィアーン」のかような *sculan* の用法の欠如に関しては、明確な判断を下すことはできない。

いずれにせよゴート語の時代に比して、未来表現の代替をなした

sculan や wollen といった分析的表現手段が、古高ドイツ語ではかなりの発展段階にあったことは確かな事実なのである。以下にその中心的役割を果たした sculan の用法を例証していくことによって、つまり sculan の守備範囲を観察することによって、それが選ばれた誘因を探り、ゲルマン人の未来に対する態度の一面を垣間見ることにしたい。ここでは先の事情から、「オットフリート」による例文を取り扱う。もとより「オットフリートの福音書」は、聖書の逐語訳ではなく、筆者自身の表現によって描かれた文学作品であることから、当時のある程度柔軟な言語観を知ることができるのである。

4. 「オットフリート」における sculan

sollen の原義は、„schulden“つまり「借金がある、負債がある」という意味に端を発し、「～することを義務づけられている、～しなければならない」という義務・要請という意味へと発展していった¹⁸。そして現代ドイツ語においても確認できるように、それが現れる多くの場合に何らかの形で主語以外の他者の意志や要求、或いは命令といった話法的意味合いが働いていた。その発展段階の初期にあたる古高ドイツ語の時代では、既に多様な用法が見られるのである。

すべての例を細部に亘って区分し(グリムは彼の辞書で22項目に区分している)、その統計的数値を出すことは後の機会に譲ることにして、本稿ではその用法を四つに大別してそれぞれの意味的特徴を追っていきたい。

(1) 話者の主張・命令・勧誘

22) fon Kriste scalt thu iz zellen, gisteist thu thaz irwellen.

(Otf. II. 9, 70)

もしあなた(読者)がそのこと(注:その話をより深く理解し、ぶどう酒のなかで味わうということ)を選択するならば、あなたはそれをキリストについて語らなければならない。

23) „Er scal irsterban thuruh nôt, sô wizôd unsêr zeinôt...”

(Otf. IV. 23, 23)

我々の律法が示しているように、彼（イエス）は必ず死ななければならぬのです。

Nōs lēgem habēmus, et secundum lēgem dēbet mōrī,

(Joh. 19, 7)

我々は律法を持っています。その律法に従えば、彼は当然死ななければならぬのです。

24) Er scal wahsan thrāto sīnes selbes dāto,

thaz mīnu werk suīnēn ingegin kreftin sīnēn.

(Otf. II. 13, 17f.)

彼（キリスト）は御自身の行為によってますます栄えなければならぬし、その結果彼の力に対して私の業は衰えなければならぬ。

illum oportet crēscere, mē autem minuī. (Joh. 3, 30)

彼は栄えなければならぬが、しかし私は衰えなければならぬ。

まず話者の主張についての例を挙げる。22) の例は、ガリラヤのカナの婚礼（ヨハネ伝第2章）について、著者オットフリートが靈的解釈を行っているところである。水瓶に汲んだ水がぶどう酒になったことについて同じように読者もぶどう酒を味わいたいなら、つまり幸福を得ようと思うなら、キリストを信じ、以下に述べているように、自身で福音書を読みなさい、という意味である。オットフリートの意志を表明しているところであり、命令に近い表現となっている。23) の例では、イエスの死についてユダヤ人たちの主張がなされている。しかし同時にイエスの死は、いわば律法が要請しているのであり、この例は以下の(2)に分類された第三者の要請とも言えよう。例文24) では、ヨハネが弟子たちにキリストに対する賛美を敬意を払って伝えているのである。sculan を用いることによって、それぞれの事象を当然の成り行きとして捉えた、話者の主張が強調されているのである。〔他に L. 25 ; I. 7, 3 ; III. 25, 34 ; IV. 1, 8 など〕

ところで例文23), 24) は上に挙げたように、聖書表現に従って述べら

れている箇所である。「ウルガータ」ではそれぞれ、dēbeō＋不定詞，oportet＋不定詞（非人称構文）が用いられ、いずれも意味は「～しなければならない」という意味なのである（dēbet mōrī「彼は死ななければならない」；illum oportet crēscere；mē minuī「彼は栄えなければならない；私は衰えなければならない」）。〔他に I. 25, 7 (Mat. 3, 14)；II. 12, 35 (Joh. 3, 7)；V. 5, 18 (Joh. 20, 9) など〕

25) Nu willu ih thir giheizan : Pētrus scalt thu heizan,

(Otf. III. 12, 31)

さあ私は汝に告知します。汝はペテロと呼ばれなければならない。

26) Ther engil sprah imo zua : „thu scalt thih heffen filu frua ;“

(Otf. I. 19, 3)

天使が彼（ヨセフ）に言った。「汝は今すぐに起きなさい。」

Surge... et fuge in Aegyptum... (Mat. 2, 13)

起きなさい…そしてエジプトへ逃げなさい…

sculan が命令的表現に近い話者の意志を表すことを、先に22)の例文で確認したが、特に2人称が主語となる文の場合にそれが顕著に現れる。例文25)では、イエスがペテロに命令している場面であるし、また例文26)では天使がヨセフに指示しているのである。2人称の相手に対する話者の意志・要求が前面に押し出されて、命令的表現となりうることは、現代ドイツ語の sollen の用法を顧みるまでもなく、納得のいくところである。実際、26)の例文では「ウルガータ」において命令文となっている（Surge「起きなさい」）。〔他に I. 23, 43 (Luk. 3, 8)；II. 23, 8；V. 10, 7 など〕

27) Wir sculun uaben thaz sang, theist scōni gotes antfang,

(Otf. I. 12, 29)

我々はその歌（賛美歌）を合唱しましょう。これは神への輝かしいご挨拶なのです。

28) „Ther unsēr friunt guato slâfit nu gimuato ;

wir sculun nan irweken, fon themo slâfe irreken.“

(Otf. III. 23, 43f.)

「敬虔な我々の友（ラザロ）が今、静かに眠っている。我々は彼を目覚めさせよう、眠りから起こそう。」

sed vādō, ut ā somnō exsuscītem eum. (Joh. 11, 11)

彼を眠りから覚ますために私は行こう。

例文27) は、聖書のなかで天使たちが神に対して賛美歌の合唱を行ったように、自分たちも、つまり自分も読者も同じように合唱しなければならないと、著者が勧誘・奨励している場面である。例文28) では、イエス自身がラザロを眠りから起こそう、と言っている（但し「ウルガータ」では vādō と 1 人称・単数・現在）のであるが、周りの弟子たちにも一緒についてきなさい、という意味を暗に含ませているのであろう。いずれの例も、話者の意志が、1 人称・複数を用いることによって、勧誘の (adhortativ) 意味へと拡張されていることが見てとれる。〔他に L. 30; I. 24, 13 ; III. 26, 11〕

(2) 第三者の要請・意志

29) Sōso ein man sih scal werien joh hēron sīnan nerien :

sō âht er io ginōto thero Kristes fīanto, (Otf. IV. 17, 13f.)

人が自分自身を守り、自分の主を救うべきように、彼（シモン・ペテロ）は激しくそのキリストの敵たちに襲いかかった。

30) Ludowīg ther snello, thes wīsdumes follo,

er ôstarrīchi rihtit al, sō Frankōno kuning scal ;

(Otf. L. 1f.)

ルードヴィッヒ王、勇敢にして英知に満ちたそのお方は、フランク人の王に相応しく、東方の国を統治しておられる。

この項ではまず、第三者を特定できない周囲の、あるいは社会的な要求を表す例を取り上げる。道徳的・道義的要請もこれに含めることとす

る。29) の例文ではシモン・ペテロの行為を正当化するために、30) の例文ではルードヴィッヒ王による施政を賛美するために、どちらの例も接続詞 so に導かれた従属文を用いることによって、それぞれが自分の当然の使命を果たしていることを強調しているのである。シモンの行為も、ルードヴィッヒ王の行為も、世人が認める言わば模範的行為なのであり、前者は道義的要請が、後者はフランク王国における不特定の民衆の要請が、sculan によって表現されている。「義務」を表す sculan の用法は、このように so の従属節によって導かれた文体で最も多く観察できるのである。〔L. 35 ; L. 67 ; I. 1, 99 ; I. 3, 49 ; I. 5, 13 ; など多数〕

なお、30) の例文では scal が不定詞をとっていないが、前半部 (Anvers) の動詞 rihten (> rihtet: 「統治する」) を補って理解しなければならない。このように sculan はあくまでも助動詞として捉え、かような場合でも本動詞とは考えない。

- 31) Sô ther antdag sih thô ougta, thaz siu thaz kind sougta,
thô scoltun siu mit willen then wizôd irfullen,
(Otf. I. 14, 1f.)

彼女 (マリア) がその幼子に授乳していた 1 週間が過ぎたとき、
彼らは進んで律法を守らなければならなかった。

- 32) Er zalt in ouh thô thâr meist, wio ther heilego geist
thie wizzi in scolta mêrôn mit sînes selbes lêrôn ;
(Otf. IV. 15, 37f.)

するとそこで彼 (イエス) は彼ら (弟子たち) に殊に、彼自身の
教えによってどのようにして聖霊が彼らの理解を深めるべきか、
ということを語られた。

次に、要求・要請している第三者が、概ね特定できる場合の例である。31) の例における法律の義務とは、幼子イエスを主に捧げるために、マリアがエルサレムへと詣でなければならないということである。ここでは、オットフリート自身が説明しているように、律法がマリアに要請しているのである。32) の例では、間接話法によってイエスの弟子たちへ

の教えが描写されているが、sculan がイエスの要求を確定する役割を果たしている。それらの要求・要請は、神や天使、あるいはこの世の人類すべてによるものであったりする。但し場合によっては、(1)で挙げた話者の意志も同時にかなり色濃く表れていることもあり、判断の困難な箇所も少なくない。〔他に I. 17, 74 (天使あるいは神) ; I. 25, 21 (神) ; III. 3, 4 (イエス) ; V. 23, 54 (全人類) など〕

- 33) Thes êr iu ward giwahinit, thô ward irfullit thi u zît,
thaz sâlîga thi u alta thaz kind thô beran scolta.

(Otf. I. 9, 1f.)

その事については既に触れたのであるが、祝福を受けたその年老いた女(エリザベート)が、子を産むこととなる時が満たされた。

- 34) West er selbo ouh sô iz zam, thaz er uns fon gote quam,
joh avur, sôs er wolta, zi imo faran scolta :

(Otf. IV. 11, 9f.)

彼(イエス)は自身で、自分が神のもとから我々のところへ来たということ、似つかわしくもお知りであった。そして再び、彼がお望みのように、神へと戻らなければならないということも。

また、特に過去時制において当然の成り行き、運命の必然といった意味が表される場合がある。それらの場合は背後に神の要請が働いているのである。エリザベートは、自分の子が産まれるとは予想もつかなかったことであるし、またそれは不可避な事実なのである。イエスが神のところへ帰って行かなければならないということも、必然性が要求しているのである。神がこの世を支配しているのであり、神が彼らの運命を決定付けているのである。〔I. 4, 86 ; I. 13, 12 など〕

因みに、sculan が接続法の代替表現となる場合があることを、以下の例が明示してくれる。例文33)と同様の出来事が描写されている箇所であるが、sculan を用いずに接続法 bâri によって表現されている。同じ表現が接続法で確認されることによって、sculan の持つ話法性を再認識できよう。〔IV. 28, 12¹⁹⁾〕

- 35) Unz siu thō thâr gistultun, thio zîti sih irvultun,
thaz si chind bâri zi woralti einmâri. (Otf. I. 11, 29f.)
彼ら（マリアとヨセフ）がそこ（ベツレヘム）に滞在していたとき、彼女（マリア）がこの世にたった一人の比類のない子を産むこととなる時が満たされた。

(3) 未来的表現

- 36) Sie sint thanne in wêwen, in arabeitin sêrên,
thaz êr ni ward io sulh fal, ouh iamêr werdan ni scal.
(Otf. IV. 7, 31f.)

人々はその時、重苦に喘ぎ、困窮のなかで苦しむであろう。そのような破滅はこれまでに決して起こらなかったし、またこれからもずっと起こらないであろう。

erit enim tunc trîbulatiō magna, quālis nōn fuit ab initiō mundī
ūsque modō neque fiet. (Mat. 24, 21)

しかしその時、世の始まりから決して起こったことがなく、またこれからも生ずることのない大きな苦難が起こるのであろう。

- 37) „Mih scal man“, quad, „gifâhan, ûfan krûzi hâhan,
bispiuan joh bifiltan joh heistigo biscoltan.“
(Otf. III. 13, 5f.)

「人は私を捕まえるであろう。」イエスは言った。「唾を吐きかけられ、痛めつけられ、激しく罵られた私を十字架につけるであろう。」

trâdetur enim gentibus et illûdetur et cōntumeliis afficietur et, cōnspuetur, et, postquam flagellâverint, occident eum,

(Luk. 18, 32f.)

（人の子は）異郷人に捕らえられ、笑い物にされ、侮辱され、唾を吐きかけられ、そして彼らは（彼を）鞭打ちにしまった後で、彼を殺すであろう。

- 38) Bî thiu sît io ginôto wakar filu thrâto, (Otf. IV. 7, 53f.)

wanta ist firholan iuih al wanne druhtfn queman scal !

いつ主が来臨なさるか、汝らには知られていないのだから、常にしっかりとよく目を覚ましておれ。

vigilāte ergō, quia nescītis quā hōrā dominus vester ventūrus est.

(Mat. 24, 42)

であるから目を覚ましておれ。というのは汝らの主がいつ来臨なさるかということ汝らは知らないのだから。

さてこの項は、意味上問題となる未来的表現を取り扱う。例文36)では、イエスがこの世の終末について弟子たちに語りかけているところであるが、前項、あるいは前々項で確認されたような主語以外の要求・要請は殆ど背後に追いやられてしまっている。前面に残るのは未来の意味だけである。同じように例文37)でも、イエスは自分の身の上にかかる未来の出来事を預言的に語っている。とはいえ、イエスは将来起こりうる、避けることのできない諸々の出来事・事象については既に承知なのであり、このことから、これらの例文では話法的意味合いが弱いといえるものの、*sculan* の義務や必然性といった意味が暗に働いているように思われる。未来的表現が確認されるのは、イエスや天使の預言が述べられているところに多い。ところで、点的(完了的)意味合いを持つ動詞は現在形で未来的な意味を持つ、ということは前述のとおりである。例文38)では、*queman* も *scal* も未来的な意味を含んでおり、同行の前半部の現在完了 (*ist firholan*) による過去の表現に対して、未来という時制を特に意識しているようである。「ウルガータ」では前2例が未来形、そして残りの1例では *sum* + 未来分詞という形態をとっており、いずれも未来を表す内容となっている。(fiet「起こるであろう」; *trādetur*「(イエスは) 捕らえられ」 *illūdetur*「笑い物にされ」/*afficietur*「侮辱され」/*cōnspuetur*「唾を吐きかけられ」/*occīdent*「(イエスを) 殺すであろう」; *ventūrus est*「(いつ) 来臨するであろう(か)」) 次の例はどうであろう。

39) „thiz ist liub kind mīn ; Jōhannes scal ther namo sīn.“

(Otf. I. 9, 16)

「この幼子は私の愛しき子供です。彼の名はヨハネと名付けられなければなりません。」

この例は、例文21) で挙げた「タツィアーン」と同じ箇所である。前例と同じように「ウルガータ」でも未来時制をとっている (vocābitur : Luk. 1, 60)。ラテン語が未来時制をとっているとはいえ、やはりここではエリザベートがザカリアに現れた天使の預言的な委託を守ろうとしている、つまり第三者の意志・要請が働いているところであるとも言えよう。しかしいずれにせよ、「ウルガータ」のラテン語の形態上の事実から、sculan が未来時制を表しうることは少なくとも認めることができる。この sculan が単にラテン語の形態による影響なのか、それともオットフリートが語法性を重視して使用したのかという問題は判断が困難なところである。なお以下に、聖書の表現に沿わない箇所をも含めて、sculan の未来的表現を成しうる箇所を挙げておくが、最初の I. 4, 30 の例のみが 39) の例に酷似して、判断のつきかねるところであり、それ以外の箇所はたいてい預言的未来を表している。

[I. 4, 30 (vocābis「呼ばれるであろう」 : Luk. 1, 13) ; I. 5, 23 (pariēs「産むであろう」 : Luk. 1, 31) ; I. 12, 17 (inveniētis「見つけるであろう」 : Luk. 2, 12) ; I. 10, 20 (praeibis「(道を準備することを) 先に行うであろう」 : Luk. 1, 76) ; I. 23, 23 (implēbitur「埋められるであろう」 humiliābitur「低くされるであろう」 : Luk. 3, 5) など—— I. 3, 38 ; I. 5, 22 ; I. 5, 51 ; II. 8, 22 ; II. 14, 75 ; IV. 5. 64 ; IV. 7, 8 など]

40) „ih scal thir ouh nu rachôn, ni drenk ih thes gimachon.“

(Otf. II. 8, 52)

私 (祝宴長) は汝 (新郎) に今言おう。このような (良い) もの (ぶどう酒) を飲んだことがない。

41) Int ih scal thir sagên, chind mîn : thu bist forasago sîn,

(Otf. I. 10, 19)

そして私 (天使) は汝 (ヨハネ) に言うのです、我が子よ。「汝は

彼（イエス）の預言者なのです。」

人間の意志が未来表現であるか否か、という問題は意見の分かれるところである。しかし現在の時点で未だなされていない行為を、話者が高い確率でもって実現させようという意志は、その可能性が将来において含まれているという点からみる限り、未来時制に取り入れても差し支えないように思える。上の2例はいずれも文中の主語が自分の意志を述べている。これらの例は、殆ど現代ドイツ語の *wollen* と同様の役割を果たしている。先の25)の例を参照することによって、古高ドイツ語における *wollen* とも代替が可能であることが窺えよう。1人称の場合が多く、また例も示しているように「言う」、「話す」、「語る」といった動詞がよく用いられる (*sagên, sprehan, irzellen usw.*)。〔I. 14, 22; I. 17, 4; II. 8, 13; III. 22, 4; IV. 26, 31 など〕

なお、例文41)のように天使が告白している場合は、ケレも分類している (Kelle 1963 S. 529) ように「～を (神によって) 委託されている」(*beauftragt sein*) と理解することもできる。〔I. 5, 43; I. 12, 7; I. 12. 9; I. 15, 28〕

- 42) „Ni duit thaz“, quâdun, „ioman ther sih ofonôn scal,
er sâr thes githenke, gidougno sulfh wirke.“

(Otf. III. 15, 23f.)

「自分のことを公に知らせようとする人は、隠れたところでそれ (業) を行う、とは決して考えないのだ。」と彼ら (イエスの弟子たち) は言った。

nēmō quippe in occultō quid facit et quaerit ipse in palam esse ;
(Joh. 7, 4)

もちろんあることをひそかに行って、それが公然と知られることを求める人はいない。

- 43) Hiar scal man zellen nōti thie geistlîchûn dâti
in ferti int in gange joh in thero liuto sange ;

(Otf. IV. 5, 1f.)

今ここで、旅と行進と人々の歌に表れている霊的な行為について是非とも語らなければならない。

42) の例では、主語 ther の意志が sculan によって表現されている。「ウルガータ」では「～を欲する、～を得ようと努める」という意味を表す quaerō + 不定詞が用いられていることから、主語の意志が表されていることを確認できる。また例文43) では、man が意志を述べているわけであるが、それは著者オットフリートを示唆しているのである。つまり、3人称の場合でも、wollen に書き換え可能な文中の主語の意志が表現されるのである。前述のとおり、wollen による書換えが可能であろう。
〔III. 25, 35 ; V. 10, 3 など〕

(4) その他の表現

- 44) Wanana sculun Frankon einon thaz biwankôn,
ni sie in frenkisgon biginnên, sie gotes lob singên?
(Otf. I. 1, 33f.)
何故フランクたちだけが、フランク語で神への賛美を歌おうとするのを控えるのであろうか。
- 45) Scal iz Krist sîn, frô mîn? (Otf. II. 14, 89)
主よ、このお方がキリストなのでしょうか。
- 46) Ther brût habêt, in war mîn, ther scal ther brûtigomo sîn,
joh heltit er thia minna bî sîna drûtinna. (Otf. II. 13, 9f.)
花嫁をもつものは、まことに、花婿なのである。そして自分の愛しい人に対する愛を保ちつづけるのである。
quī habet spōnsam, spōnsus est ; (Joh. 3, 29)
花嫁をもつものは、花婿なのである。
- 47) „Ni tharft es“, quâdun, „lougnen, thîn sprâcha scal thih
ougen ;“ (Otf. IV. 18, 27)
(近くにいた人がペテロに) 言った。「そのことを否認しなくともよい。お前の言葉(詛り)でそれとわかるのだ。」

nam et loquēla tua manifēstum tē facit. (Mat. 26, 73)

お前の言葉遣いがお前（の出身地）を明らかにするからだ。

例文44)では著者が、聖書がフランク語で未だ書かれていないことに対する訴えを苛立たしきをもって主張している。45)の例では、サマリヤの女が、イエスの言動に多少の疑念の意を表して民衆に、また自分に問いかけている。これらの疑問文は、問いかける対象が他人であれ、自身であれ明確な返答を期待していない。疑問文で表れる *sculan* は、話者の、ある出来事・事象の不確実性に対する疑念・疑惑を表すことがある。〔他に I. 1, 57; V. 23, 239 など〕

例文46), 47)は主語以外の要請、未来的表現など、これまで確認してきた用法のいずれにも分類できないようである。またこれらの箇所に対応する「ウルガータ」の表現ではいずれも迂言形式をとっておらず、上に挙げたように現在時制である (*sponsus est* 「花婿なのである」; *manifēstum tē facit* 「お前(であること)を明らかにするのだ」)。グリムが比較的古い時代に限られた用法として挙げている²⁰ように、それは現に存在している事象・行為を、論理的・倫理的に当然のこととして表現する用法である。*sculan* を用いて自明の理を強調し、そうすることによっていわば確認の意が込められているように思える。〔他に III. 22, 64〕

5. まとめ

ウルフィラが、ゲルマン語には馴染みのなかったギリシャ語の未来時制を翻訳する際、造語手段、法の転換、あるいは迂言形式といった技法を用いたことは画期的な試みであった。しかしながらそのような様々な試みはいずれも、未来時制として確固たる位置を占めるには至らなかった。古高ドイツ語の時代に入ると、例えば *habēn*+過去分詞によって完了時制、また *werden/wesan*+過去分詞によって受動形式が生み出されつつあったように、情勢は迂言形式が勢力を持つ状態へと傾くのである。未来表現としての *duginnan/haban*+不定詞は衰退したものの、ゴート語において殆どその役割を果たすことのなかった *sculan* (got. *skulan*) が台頭してくるのである。しかしかような言語史の流れにあって、それ

は未来の意味を失うどころか、広い領域に亘ってますます自身の守備範囲を固めていった。つまり「オットフリート」における *sculan* は、これまでの例証をもって確認してきたように、ほとんどの場合、話法的態度を失っていない。第4章の(1)、(2)の用法では、常に主語以外の他者による何らかの働きかけが表現されているし、また(3)の未来的表現でさえも、預言的内容、あるいは主語の意志がそのまま表現されている。

これまで観察してきた *sculan* という話法の助動詞にみられるような文法上の話法とは、陳述に対する話者の心的態度を表す手段であり、それは他人に対する要請や要求、あるいは命令、また自分の意志であるので、現実の世界ではなく、思考の世界がその領域となる。未来表現も、同じように未だ現実とはなっていない、あるいは現実において存在していない想像・思考の世界であるといえよう。つまり話法性と時制上の未来とは表裏一体のものであり、それぞれの意味の現れる度合いによって、一方が決定づけられるのである。プリंकマンの言うように (Ibid., S. 54f.), ギリシャ語・ラテン語が未来時制を持っていたのは客観性がそうさせるのであって、彼らは対象を見つめる冷静な態度を持っていたのに対し、ゲルマン人はそのような客観性をもたず、話者の解釈として未来を捉えていた。「観察する人ではなく、欲する人、願う人、期待する人、関心を持った人として、ゲルマン人は来るべきことに対峙していた。(中略)それは話し手からの言語表明なのであり、聞き手に対する配慮によって条件づけられてはいない」のである。

このようなゲルマン人の主観的世界にあって、修道士であったオットフリートは、神に対する畏敬の念から *sculan* を多用したのだと考えたい。預言的未来、運命の必然、また話者・第三者の要請や意志でさえも、神が決定づけていると見做し、それらを避けることのできない、宿命感の漂った義務として捉えたのだろう。本稿で取り扱った未来的な表現は「未来」と考えるより、オットフリート自身の信仰によって、神の要請が常に働いていると考えられる。とすれば当時のキリスト教布教政策の影響を受けて生じた産物と見做すこともできようか。いずれにせよラテン語の未来時制を認めてはいたものの、時間的な規定によって現在と未来を区切って理解するという感覚はまだ定着していなかったことは確か

なのである。

テキスト

- Erdmann, Oskar (hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch*, Tübingen, 6. Aufl., 1973.
Piper, Paul (hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch*, Hildesheim/New York
Nachdruck der Ausgaben Freiburg u. Tübingen 1882 u. 1884, 1982.
Sievers, Eduard (hrsg.): *Tatian*, Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar, Paderborn, Unveränderter Nachdruck, 1966.
Streitberg, Wilhelm (hrsg.): *Die gotische Bibel*, Heidelberg 1908.
Nestle-Aland (hrsg.): *Novum Testamentum Latine*, Stuttgart, 2. Aufl., 1992.

なお、古高ドイツ語の例文中には曲アクセント記号を、ラテン語には長音符を付加した。

注

- 1 Brinkmann, Hennig: *Sprachwandel und Sprachbewegungen in alt-hochdeutscher Zeit*. In: *Studien zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*, Bd. I, Sprache. Düsseldorf 1965, S. 55.
- 2 Streitberg, Wilhelm: *Gotisches Elementarbuch*, Heidelberg, 3. u. 4. Aufl., 1910, S. 201ff.
- 3 kumbjan という語はゴート語には存在しないが, ana- は方向を表す前綴と見做すことができる。このことから完了的な意味に近いと言えるであろう。
- 4 Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax Bd. 2*. Heidelberg 1822, 2. Aufl., 1989, S. 231.
- 5 もう 1 例は: Ph. 1, 18.
- 6 残りの 2 例は: Kor. 11, 12, Thes. 3, 4.
- 7 主としてギリシャ語の以下の表現が現れる箇所に skulan+不定詞が用いられている。
μέλλειν+不定詞「～しようとしている」
ἔχειν+不定詞「～できる」
ὀφείλειν+不定詞「当然～すべきである」
δεῖ +不定詞 (非人称)「～するのを必要とする, ～する義務がある」

- Schulze, Ernst : *Gotisches Glossar*, Magdeburg 1848, S. 315f.
- 8 Grimm, Jacob : *Deutsche Grammatik* IV. Hildesheim ; Reprographischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh, 1898, 1967, S. 209.
- 9 例えば : ni curi thir forhten, giloubi ekorodo inti so uuirdit siu heil. (Tat. 60, 11) ; nōlī timēre, crēde tantum et salva erit. (Luk. 8, 50)
「驚いてはいけない。ただ信じなさい。そうすれば彼女(娘)はよくなるのです。」
- 10 Saltveit, Laurits : *Studien zum deutschen Futur*, Bergen/Oslo 1962. S. 20.
- 11 Sievers, Eduard (hrsg.) : *Tatian*, Paderborn ; Unveränderter Nachdruck, 1966. S. 342.
Kelle, Johann : *Glossar der Sprache Otfrids*, Aalen, Neudruck der Ausgabe 1881, 1963. S. 35f.
Piper, Paul : *Otfrids Evangelienbuch*, II. Theil. Glossar und Abriss der Grammatik, Freiburg 1887. S. 166f.
例を挙げると、「タツィアーン」では : Thanne biginnet ir quædan : (Tat. 113, 1) ; Tunc incipiētis dicēre (Luk. 13, 26) 「そのときあなたは(以下のように)言い始めるであろう。」——ラテン語では incipere + 不定詞(「〜し始める」) が用いられているところである。ここは未来時制であるが、incipere 対 biginnen が問題なのであり、それは度外視してよい。
「オットフリート」では : Biginnent frammort wisēn wio sie inan firliēsēn, (Otf. IV. 1, 3) 「そのときから彼ら(祭司たち)は、いかにして彼(イエス)を亡き者にしようかと心が動き始めるのである。」
- 12 Sievers 1966, S. 346. /Kelle 1963, S. 257. /Piper 1887, S. 177.
例を挙げると、「タツィアーン」では : Ih haben toufi gitoufit uuerdan, (Tat. 108, 7) ; Baptismum habeō baptizāri, (Luk. 12, 50) 「私は洗礼を受けなければいけない。」——「タツィアーン」にみられるこの形式は、多くがラテン語の habere + 不定詞の模倣といえよう。
「オットフリート」では : Habēn ih zi klagōnne joh leidalfh zi gagēnne, (Otf. V. 7, 23) 「私は嘆き悲しみ、そして苦しみを口に出さなければならないのです。」——また eigūn が habēn の替わりを務める場合もある。
- 13 Willmans, Wilhelm : *Deutsche Grammatik* 3. Abteilung : Flexion 1.

- Hälfte : Verbum. Berlin/Leipzig 1922, S. 175.
- 14 この biginnen は giwinnen と脚韻をそろえるために使用されているものとする (本章(2)の結びの部分参照)。
- 15 Kelle 1963, S. 414.
- 16 Erdmann, Oskar : *Grundzüge der deutschen Syntax*, 2 Bände in einem Band, Hildesheim/Zürich/New York 1985, S. 97.
Willmans 1922, a. a. O. /Brinkmann 1965, S. 28.
- 17 他に : Tat. 13, 16 ; 112, 2. 但し, 後者ではラテン語は sum+未来分詞という未来表現となっている。
- 18 Kluge, Friedrich : *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, 23. Aufl. Berlin/New York 1995, S. 770.
Paul, Hermann : *Deutsches Wörterbuch*, 6. Aufl., Tübingen 1966, S. 608f.
- 19 この箇所では, 「ウルガータ」の表現が接続法となっている (Joh. 19, 24).
- 20 Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm : *Deutsches Wörterbuch*, zehnten Bandes erste Abtheilung, Leipzig 1905, S. 1496.

„sculan + Infinitiv“ und Ausdrücke für die Zukunft im Althochdeutschen

— anhand von „Otfrid“ und „Tatian“ —

Tetta KANEKO

Das Germanische kannte nur zwei Zeitformen : Präsens und Präteritum. H. Brinkmann sagt : „Im Präsens gab man, was dem Bewußtsein lebendig und gegenwärtig war, im Präteritum das weiter Entrückte.“ Unter diesem Tempussystem begriff man das Kommende in der gegenwärtigen Welt, also gewöhnlich kam zur Bezeichnung des Zukünftigen das Präsens zur Verwendung. Die Germanen hatten

keine Perspektive für die Zukunft, anders gesagt, in ihrem Bewußtsein wuchs noch kein Zeitgefühl für die Zukunft. Aber wo Übersetzer das in lateinischen oder griechischen Vorlagen auftretende Futurum vorfanden, sahen sie sich zu großen Bemühungen um adäquaten Ausdruck genötigt. Es wurden viele Versuche unternommen.

In der gotischen Zeit verwendete Wulfila für das griechische Futur im allgemeinen : 1. das Präsens perfektivischer Verben (oder durch „ga-“ Präfigierung), 2. den Optativ, 3. „duginnan“+Infinitiv, 4. „haban“+Infinitiv, 5. „skulan“+Infinitiv. Mehrheitlich standen perfektivische Verben (oder mit „ga-“ Präfix) im Präsens, (bei derartigen Verben wird ursprünglich das Moment des Geschehens oder des Vorgangs erst in der Zukunft durchgeführt), manchmal stand unter Einwirkung modaler Nuancierung der Optativ. Andere Strukturen(3. 4. 5.) erschienen nur selten. Aus den Belegen ergibt sich, daß im Gotischen periphrastische Formen zum Ausdruck der Zukunft versucht, jedoch noch nicht fest eingebürgert waren.

Im Althochdeutschen, als das Zukünftige noch immer vorwiegend im Präsens ausgedrückt wurde, spielten die neuen Strukturen („duginnan“+Inf., „haban“+Inf., bzw. der Optativ im Gotischen) keine Rolle, im Vergleich damit etwa „sculan“ (nhd. sollen) und (geringer) „wollen“ eine größere Rolle.

Im „Otfrid“ und „Tatian“ finden sich zwar viele Belege mit „sculan“, aber im letzteren vermeidet man, es für die Zukunft zu gebrauchen. In dieser Arbeit wird anhand des „Otfrids“ der Gebrauch von „sculan“ untersucht, um eine bestimmte Haltung der Germanen für die Zukunft herauszufinden.

In diesem Werk läßt sich der Gebrauch von „sculan“ im großen und ganzen in vier Teile gliedern : 1. Behauptung, Befehl und Aufforderung des Sprechers, 2. Forderung und Wille des Außenstehenden, 3. zukünftige Ausdrücke, 4. das Übrige (Bedenken, Zweifel und Nachdruck des Vorgangs oder der Handlung). Unter 1. und 2. zeigt sich

immer der Wille oder die Forderung des außer dem Subjekt Stehenden, wie dies auch im modernen Deutsch beobachtet werden kann. Die Ausdrücke für Zukunft verstehen sich oft als prophetisch, ferner als Wille des Subjekts, der mit „wollen+Inf.“ umgeschrieben werden kann, während „sculan“ in Vulgrta oft für das Futur steht.

Von der gotischen zur althochdeutschen Zeit entwickeln sich allmählich periphrastische Formen, insbesondere „sculan + Inf.“, doch in den meisten Fällen bleibt eine modale Färbung (Verpflichtung usw.). Letztlich äußert sich im Modus die subjektive Haltung zum Inhalt eines Geschehens. Ebenso bleibt die Zukunft stets außerhalb der gegenwärtigen Welt. Die Germanen begriffen Zukünftiges nicht objektiv, sondern durch die Auslegung des Sprechers. In dieser subjektiven Welt versteht Otfrid das Kommende als Forderung Gottes und nimmt es nicht in eine zeitliche Reihung auf.